

田端神社の木槌



〔登録年月日〕平成十二年二月二日
 〔種別〕有形民俗文化財（信仰）
 〔名称〕田端神社の木槌
 〔点数〕一括
 〔所有者等〕田端神社
 〔所在地等〕荻窪一―五六―一〇

田端神社の木槌

田端神社はもと北野神社といい、明治四二年（一九〇九）に田端村内の四社を合祀したが、そのうちのついに子ノ神社（旧所在地・荻窪三二〇付近）があった。子ノ神社は江戸時代には子の権現と呼ばれ、足腰の痛みなど、腰から下の病気を治してくれる神とされた。子の権現の信仰は、品川左京の家臣良影の子、良枝が足痛に苦しめられていたが、ある夜、枕元に大国主命（一説には大黒天）が現われ、木槌で足腰をさするように告げたのが始まりだったと伝えられている。田端の子の権現の場合、神前に奉納された木槌を借り受け、この木槌で患部をさすり、快癒を願う。願かけの期間である二日間、祈願が成就して病気が治れば、祈願者は新たに木槌を作り、借り受けた木槌とともに神前に奉納し、お礼参りをしたと伝えられている。田端神社ではこの木槌を「木槌」と呼び慣わしている。

木槌の形状は横槌型で、全長一〇cm程度の小型のものが半数以上を占めている。材質は多様だが、杉・樫を使ったものが多い。構造は一木造と差し柄造のものがある。

木槌の銘文によると、現存する木槌は明治四三年（一九一〇）のものが最も古く、明治四三年から大正九年（一九二〇）にかけて奉納されたものが多い。この時期は武井、堤、小林といった地元の人によって奉納されたものが大半を占め、信仰が盛んであったことがうかがえる。

治病に関する民間信仰を伴った木槌で、杉並区内に今日なお残存する庶民習俗を物語る資料として重要である。

【文化財所在地】

